スガ！　野枝！　炎の女たち
―― 重なり合うふたり

平田　美知子

1. はじめに

3ヶ月ほど前に、「伊藤野枝」について書くようにという課題をいただいた。伊藤野枝と言えばすぐに、大杉栄とともに虐殺された「甘粕事件」を思い起こす。そして、きりっと引き締まった彼女の面輪が目に浮かぶ。

それと同時に、私には、管野スガが思い起こされ、幸徳秋水らとともに殺された「大逆事件」と重なって、なんとも居たたまれない気持ちになる。

※判決書には「管野スガ」とあるが、本人は「すが子」と書いていた。筆名は「須賀子」としていた。

10数年前、私は、管野スガのことを調べていくうちに、スガの生きざまに夢中になり、彼女に関わった弁護士の平出修や歌人の石川啄木のことまで資料を読み漁り、『部落解放ひろしま』の「うつしみ」欄に文章を書いた（平田2002; 2003）。

野に落ちし種子のゆくへを問いますな
東風吹く春の日を待ちたまへ

これは管野スガが詠んだ短歌である。スガは、「自由を求め、真に世の発展を願い行動することに、なんのためらいがあろうか」とか、「百年の後になって、人びとは私たちの刑死を再検討をし、罪名を書き直してくれるだろう」と言っている。そこに、現代に生きるわれわれの責任のようなものを感じるのだ。

1911年の「大逆事件」から100年以上が経過した。われわれは、スガたちが播いてくれた種子を、いずこへ芽吹かせ、開花させ、どのような色の花を咲かせたであろうか。

伊藤野枝と言えば大杉栄、管野スガと言えば幸徳秋水。私は、文章を書く

とき、いつも同じような境遇にあった2人のことを思い起こす。そして、2人を対比させながら関連資料を調べるくせがある。2〜3年前にも『部落解放ひろしま』に柳原白蓮のことを書いたが、その時も、九条武子のことが頭に浮かんだ（平田2015）。また今年の6月27日、広島市の平和公園を訪れたオバマ大統領が、職を退いても広島、長崎のことに心を砕いてくれるだろうかという話になった時、ふっと思い出したのが、ジミー・カーター元大統領のことであった。

第2次世界大戦中、広島県甲奴郡小童の正願寺の梵鐘が、銃弾を作るために軍に供出させられた。しかし、梵鐘は兵器にはならず、現在も、アトランタのカーターセンターに展示されている。そのことが縁で、カーター元大統領は、1990年から3度、甲奴郡小童を訪問された。現在も毎年夏休みになると、甲奴の中学生がアメリカに行き、ショートステーして、お世話になっていると聞いている。

オバマ大統領の訪問を受けて、多くの人が、広島・長崎を再訪することを期待している。オバマ大統領もノーベル平和賞を受賞しているが、カーターも受賞している。オバマ大統領も再来するに違いない、と私は思う。

このように、同じ時代の同じような境遇にある人たちが、同じようにその時代を駆け抜けている、という発見（？）は、私に生きる力を与えてくれる。伊藤野枝（1895-1923年）と管野スガ（1881-1911年）が14歳違いで、大杉栄（1885-1923年）と幸徳秋水（1871-1911年）も14歳違いである。今回はじめて気づいたことであるが、偶然とはいえ、この同じ歳の差は、なんと運命的なことであったろうか。

野枝とスガは、社会活動家として、また、結婚相手というより革命家の同伴者として、同じ方向を見つめて進む同志として生活をともにし、権力により命を奪われた人たちである。

伊藤野枝は、著書『自己を生かすことの幸福』において、根本となる考えを書いている。「私共は自分達の生活の目標を世間の人たちのように、ただ無事に大した不足もなくその日その日が送れて、円満な家庭をつくって、子供達の成長を楽しみにするというような処にはおいていません。それどころか、私共は反対に、平穏無事な楽しい私共の家庭の謂ゆる幸福が、何時逃げ出しても恐れない決心を何時も何時も忘れずに持っていなければならないのです」（伊藤3巻）。野枝は、自分のように、堂々と権力に歯向かう思想を持つ者は、社会主義者を排除する時代風潮にあっては、いずれ大逆事件のような形で権力に殺されるだろうという予測を持っていてのことだ、と言っているのだ。

大杉栄の文章、「美はただ乱調にある。諧調は偽りである」や「春三月縊り残され　花に舞ふ」にあるように、また野枝の文章、「吹けよ　あれよ　風よ　あらしよ」にあるように、この人たちは、この時代を、社会の変革のためには命を惜しまない、という覚悟を持って生きていたということだ。

2.「乱調」にあり

伊藤野枝をはじめて知ったのは、瀬戸内晴美の『美は乱調にあり』を読んだ時だった。もう30年程前になろうか。すさまじい生き方をした人だと思った。

自分が求めているものに向かってまっしぐらに走る。なんであれ失うことの怖さを知らないと言おうか。ひたすら生きた人という表現が当たっているだろう。

『平塚らいてう――近代と神秘』の著者・井出文子は、そのような野枝を、「相手のものを奪っても生きのびたいとする上昇精神とヴァイタリティであった」(井出1987: 137) と表現している。しかし私は、彼女には「生きのびたいとする」という「生」への執着はなかったように思う。それどころか、自分の命のことなど構ってはおれないほど、社会の変革を希求し続けていた女性であったと思うのだ。

大杉栄、伊藤野枝、そして甥の橘宗一（まだ6歳であった）の3人は、1923（大正12）年9月1日に起こった関東大震災のどさくさに紛れて、9月16日、憲兵大尉甘粕正彦とその部下5名によって虐殺され、古井戸に投げ込まれた。偶然にも、今回私は、この事件が起きた9月16日からこの原稿に取り組むことになった。この事件から遡ること12年、幸徳秋水や管野スガ等12名が、権力の手で殺害された大逆事件が起きた。そのほとぼりも冷めない頃のことであった。

伊藤野枝は、平塚らいてうが主宰する『青鞜』の同人であり、「新しい女」と言われた女性の一人である。らいてうから18歳の若さで『青鞜』を譲り渡された野枝は、『青鞜』を守り抜く約束をしたが、1年半で終わらせてしまった。大杉栄との出会いが、そのような結果を招いたといってもいいだろう。

野枝は、大杉と結婚する前に、上野高等女学校の英語の教師でダダイストの辻潤と結婚して、2人の男の子を産んでいる。その前は、女学校を卒業してすぐの頃、親の進めた結婚で、九州の実家近くの農家へ嫁いでいる。また、辻潤と同棲していた頃、『青鞜』の野枝の文章を読んで好意を持った青年、木村壮太にも心を動かしている。毎日送られてくる手紙と、その間、3度ほど会っただけの男性に、野枝は心を動かされた。農家の平凡な男性のところ

から出奔して辻潤に走り、その生活がやっと落ち着くかどうかという頃のことである。その辺りの経緯は、『青鞜』に発表された「動揺」に詳しく書かれている。

野枝は、なぜこれほどまでに男性遍歴をしたのだろうか。情熱的で多情多感な女性であったからと言っても、28年ほどの人生を、一般の人の何倍もの速さで、社会変革を求めつつ大恋愛をして、この世を駆け抜けていった。

瀬戸内晴美の『美は乱調にあり』の表題にあるように、また、大杉栄の「美はただ乱調にある。諧調は偽りである」の言葉にあるように、野枝は、生きる証をみずからの「乱調」に求めた人なのであろう。前進するためには、どんな時代であれ突進することをためらわない。そのためには、犠牲を犠牲とも思わず、まっしぐらに進む。それは、閉塞した時代にあってはじめて女性解放を現実のものにしようと闘った一人の生きざまであった。これが、現在の女性の立場から、精一杯の野枝を擁護して言える言葉である。自由を求めて闘う者として、求めてやまない理想の愛に向かって、また若さゆえに突進し続けたからだ、ということになろうか。

3. 野枝の生い立ち

伊藤野枝は、1895（明治28）年1月、福岡県糸島郡今宿、博多湾のさらに小さな入江の今津湾にある小さな村で生まれた。父が日清戦争に出征中のことで、野枝は、驚くほど大きな産声を張り上げて生まれた。野枝の上には2人の兄がいて、祖母は、野枝の産声を聞いただけで男の子だと思い、がっかりして産婆を呼ぼうともしなかった。

戦地から帰った父親は、女の子だと知って大喜びで、いつも連れ歩いていた。野枝は、周囲からちやほやされて育った。気に入らない時は大声で泣き叫び、言うことを聞かないからと押し入れに入れられると、しばらく泣いていても、いつの間にか静かになる。そっと覗いてみると、壁に貼ってある新聞紙の仮名文字を一生懸命読んでいる。掃除を手伝うようにと言われると、片方の手ではたきを振り回すふりをして、もう片方の手に本を抱えて読み耽っている。いつもこんな具合であった。

家が貧しかったので、父方の叔母（キチ）が野枝を小学校の時から引き取って、面倒を見た。野枝の家は「よろずや」という廻船業を営み、おおいに栄えていたが、野枝の生まれる頃には落ちぶれて、野枝を養女に出すことになった。

養母は、「野枝はきれいでござりましたとも。はっきりした顔立ちのよか女でござりました。本を読むのが大好きで、掃除とか裁縫とか女らしいこと

はすきではございませんでした」(瀬戸内1969: 22) と、瀬戸内晴美の取材に答えて言っている。

野枝は、叔父 (キチの夫準介) に「上京してどうしても女学校に入りたい」と、手紙で懇願している。それは、学費や生活費の問題があったからであるが、結局、野枝の思う通り、上野高女の4年生への編入試験を受けて合格した。編入したのは、叔父夫婦に費用の負担をかけないためであった。

こうして野枝は、上野高女で英語教師の辻潤と出会うことになる。4年生に編入した野枝は、英語以外の教科は、ずば抜けてよくできた。九州の田舎で育ったため、英語を十分に学ぶ環境になかったからだ。あれほど輝いて勉学に励んでいる野枝が、どうして英語だけができないのだろうかと、辻は思った。

辻潤とは、どのような人物であったのだろうか。辻はダダイストの中心人物で、翻訳家、思想家、画家で、宮沢賢治を早くから評価した人であった。英語、尺八、バイオリンの教師でもあった。辻は、次のように書いている。

人は生まれながらにして完全である。
その人として成長し、その人として死ねばそれでいいのだ。
「真人間」にも「超人」にも「犬」にも「仏」にもなる必要もなければ、また、他から「なれ」という命令を受けることも無用なのである。

釈尊は、生まれ落ちるとすぐに立って「天上天下唯我独尊」と言ったと伝えられているが、辻も同じようなことを思ったのであろうか。辻の言葉は、「人間は、一人ひとりが尊いのだ。個人として成長し、みずからが趣くままに、自由に羽ばたけばいいのだ」ということであろうか。野枝が辻と出会ったのは、17歳の頃で、辻は23歳であった。

4. 歴史的背景

日露戦争 (1904-05年) 勃発の前夜、国民を熱狂的な戦争熱に駆り立てたのは、新聞や雑誌による世論の扇動であった。

『時事新報』は、連日のように「朝鮮問題」を取り上げて、日本の「民族的危機」であると世論を煽った。徳富蘇峰の『国民新聞』や三宅雪嶺の『日本』などは、早くから「挙国一致の聖戦」を煽っていた。対露硬同志会は、ロシアへの不撤兵に対して、「日本は勇往邁進せざるべからず」という「大会決議案」を満場一致で可決し、「ロシア打つべし」と政府に「対外硬」を迫り、桂首相に「警告書」を送った。また、東京帝大などの七博士 (戸水寛人、富

井政章、寺尾亨、金井延、高橋作衛、中村進午、小野塚喜平次）が、政府に「対露硬意見書」を提出するなど、世論は、日ごとに主戦論へ傾いていった。

このような状況の中で「非戦論」の立場にあったのは、『万朝報』『東京毎日新聞』『滋賀日報』『牟婁新報』などであった。また内村鑑三は、クリスチャンの立場から「非戦論」を唱えていた。

少し横道に逸れるが、元真宗大谷派の伊香間祐學師は、内村鑑三が日露戦争直後に「戦争開けて盛んに戦争を謳歌し、平和なりて直ちに平和協会を興す。これ今日のキリスト信者のなすところなり。言ありいわく、『生ける魚は水流に逆らいて游ぎ、死せる魚は水流とともに流る』と。かつて一回も世に逆らいしことなく、常にその潮流にしたがいて往来する我が国今日のキリスト信者は、死せる魚の類にあらずして何ぞや」と言っているのを引用して、「教会が世間に迎合してその生命を失っている現実を憂えて悲しんでいる、現在の仏教も同じだ」と嘆いている（川本1997: 121-122）。

ロシアの満州撤兵の第3期になると、開戦は避けられないということになり、『万朝報』も態度を急変させて、開戦論を主張するようになった。社長の黒岩周六は、営業上、主戦論に引きずられなければならなかったからである。

神田キリスト教会館で開かれていた「社会主義者反戦大会」に出席していた幸徳秋水、堺利彦は、すぐさまその席上で『万朝報』を退社すると宣言した。『万朝報』紙上に、2人は「退社の辞」を掲載して、社を去り、内村鑑三も「万朝報」との縁を切った。幸徳と堺は、その1ヵ月後に『平民新聞』を刊行した。木下尚江らも同人として協力をした。『平民新聞』の巻頭の「宣言」には、次のように書かれている。

> 吾人は人類をして博愛の道を尽さしめんが為に平和を唱道す。故に人種の区別、政体の異同を問はず、世界を挙げて軍備を撤去し、戦争を禁絶せんことを期す。

幸徳が、『平民新聞』に「嗚呼増税！」「ああ六千万円の増税、苛重なる増税よ、これ実に“戦争のため”なるべし。……国民の苦痛は依然として苦痛ならざる可らず」と書いたため、『平民新聞』は、新聞紙条例違反で発売禁止とされた。『平民新聞』は、国際的な反戦連帯を強調し、幸徳は、社会主義の闘争手段は、あくまで武力を排し、道理と言論の闘いでなくてはならないと主張した。こうして「万国の労働者同盟せよ」と、戦争反対の国際連帯を強く打ち出した。

同じく1904年7月に、婦人矯風会は、東京神田の青年会館で大会を開いた。

この大会に管野スガは、大阪支部代表として参加していた。この時の弁士に木下尚江がいて、『平民新聞』を掲げて「婦人問題の解決を望むものはこれによるしかない」と述べた。この演説を聞いた管野は、すぐに平民社に堺利彦を訪ねた。この頃の日本で聞いたことがないような平等思想や平和運動の走りともいうべき熱烈な演説は、スガの心を震い立たせた。

スガは、『平民新聞』への寄付を行い、大阪に「平民新聞読者会」をつくり、社会主義研究会にも力を注いだ。スガは、キリスト教徒であったから、猛烈な勢いで社会主義思想に影響されていった。片山潜が日本とロシアの代表として、オランダで開かれたインターナショナル第6回大会において英語で演説し、1,000人を超える聴衆から拍手喝采を受けたことも、彼女に大きな自信と確信を持たせた。

この頃、伊藤野枝は、まだ10歳に満たない少女であった。親の言うことを聞かず、押し入れに入れられると、壁に貼られた古新聞を一生懸命に読んでいた頃である。

世の中の動きを報ずるのには、新聞が大きな役割を果していた頃であり、利発で感受性の強い野枝には、読めない漢字を飛ばし読みしていたとしても、新聞から少なからず影響を受けたものと思われる。与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」は、この頃に発表されたものである。

こうして権力の弾圧が続くほどに、社会主義者たちは戦争反対の闘志を燃やし、幸徳は『平民新聞』に「非戦論を止めず」を書いた。しかし1905（明治38）年1月に、ふたたび新聞紙条例違反で禁固、罰金、『平民新聞』の発行禁止を受け、印刷機械まで没収された。幸徳らは、自発的に『平民新聞』の廃刊を決意する。その年の2月、幸徳は、巣鴨監獄に入獄する。10月には平民社を解散し、11月にはアメリカへの亡命を余儀なくせられる。

他方で、紀州田辺の『牟婁新報』の毛利清雅社長は、主戦論者でありながら、小田野声や豊田弧寒を記者として雇って、社会主義や厭戦論の記事を書かせる。そしてスガも、この社に関係していく。

毛利清雅は、1871年和歌山で生まれた。高野山中学、高野山学林に学んで、高山寺住職になった。毛利は、木下尚江や堺利彦らとともに文筆活動をして、足尾鉱毒問題にも関わった。帰郷して『牟婁新報』に関わることになるが、大逆事件で逮捕された。成石平四郎、大石誠之助、沖野岩三郎らとともに「社会主義を鼓舞すべし」「基督教の拡張を望む」「所謂金持ちを排斥すべし」などの論文を発表し、県内外の社会主義者や若者の心を捉えた。そして、多くの人々の心を捉えた『牟婁新報』は、地方紙としての役割を超え、全国の社会主義者の機関紙としての役割を果すようになる。中央からは、荒畑寒

村や豊田弧寒、管野スガらが加わり、『牟婁新報』の評判は頂点に達した。

十数年前に、筆者が、大逆事件の真相を追って和歌山県新宮市を訪れた時のことである。「全国大学同和教育研究集会」に参加してのことだ。当時は、東京からはるか離れた和歌山県新宮市に、どうして大逆事件に連座した人がこんなにたくさんいるのか、ということを十分に理解していなかった。南谷墓地にある大石誠之助（医師）、高木顕明（僧侶）、峯尾節堂（僧侶）の墓を訪ねた。他にも崎久保誓一、成石平四郎、勘三郎兄弟など「紀州・新宮グループ」と呼ばれる人たちがいた。2001年9月、新宮市の定例議会において、市長提案による顕彰決議が行われ、大逆事件は冤罪であったとされた。私が新宮へ行ったのは、その決議の数年前であった。高木顕明の僧籍復権の闘いが、東本願寺で行われていたのもこの頃であったと記憶する。

1907年、『牟婁新報』を退社した荒畑寒村は、田辺から京都に移り住んでいた管野スガと結婚（同棲か）している。これは1年ほどで破局し、1909年にスガは、幸徳が主催する平民社に秘書として住み込んでいる。この年の8月、スガは、幸徳との結婚を獄中の寒村に報告するなど、私的にも慌ただしい日常を送ることになった。

寒村に魅かれ、思想的なことが影響したからであろうが、1年数ヵ月で寒村との関係に見切りをつけて、同志であった幸徳のもとに走った。そしてこの頃、「赤旗事件」が起こる。1908（明治41）年6月18日、山田孤剣が仙台監獄を出獄して上野駅に着いた時、硬軟両派の社会主義者たちが赤旗を打ち振りながら山口の出迎へデモを行った。6月22日、山口歓迎会の閉会後、「無政府」の赤旗を担いだ大杉が、待ち構えていた警官に捕まった。そこへ「無政府共産」の旗をかざした荒畑も出てきた。スガたちも会場から出てきて警官ともみ合いになり、堺、山川均、大杉、荒畑ら14名が逮捕された。荒畑に面会に行ったスガも投獄された。これが、「赤旗事件」と言われるものである。

出獄した秋水とスガは、『自由思想』を発行する。幸徳は、そこで次のように書いている。

> 我々は唯に宗教問題のみでなく、一層広き意味に此語を用ゐたい。即ち、政治問題にも、経済問題にも、婦人問題にも、矢張習俗的・伝説的・迷信的の権威に束縛されないで、常に「道理」を以て最後の且つ唯一の判断者としたい。即ち、総ての問題に対し、総ての方面に向かって「自由思想」を以て進みたいのです。

そして、まだ無名のスガを編輯とした。幸徳は、その理由を次のように

書いている。

管野女史は雅号を幽月といふ。久しく関西の文壇で知られ、後ち東京の『毎日電報』に従事して居ましたが、此雑誌の読者には、未だおなじみが薄いかもしれません。去年赤旗事件で入獄した一人で、日本の法廷に立て「予は無政府主義者なり」と大胆に公言した婦人は、恐らく此人が最初なのでせう。

この頃、荒畑はまだ獄中にいた。幸徳とスガは、発行責任者として新聞紙法違反としての罰金を処せられるなど、権力との闘いに心身ともに疲れ切っていた。

スガは、幸徳の秘書としての任務や新聞、雑誌の責任などを負っていた。究極の闘いを共に担う日々に、次第にお互いに魅かれて行ったのは、やむを負えない事実であった。

同志の中には、二人の関係を「秋水と幽月（すが）があやしい」などと騒ぎ出すものがいて、徐々に運動から遠ざかっていくものが増えてくるようになった。それまでかばってくれていた同志の中にも、かばいきれなくなった人たちもいる。

スガは、荒畑寒村とは赤旗事件以前に別れていたのだが、獄中の寒村に「内縁の妻」という名目で差し入れをしたり、面会をしたりしていたため、周囲は結婚の状態がずっと続いていると思っていたようである。そこへ秋水との恋愛問題が起きたので、ますます混乱状態になってしまった。

年表によると、「1908年5月、荒畑との結婚生活は冷却、一時別居することになる。同年8月14日、千葉監獄の荒畑寒村に、幸徳との結婚を知らせ、離婚の確認をさせるため書信を出す。9月6日、荒畑より、幸徳との結婚に同意するという書信が来る。1910年1月25日、赤旗事件の荒畑勝三（寒村）、千葉監獄を満期出獄する」となっている。

これだけの期間に、権力との闘いを続けながら、恋愛関係には、なお強烈な動きがあった。監獄への出入りが何回も繰り返され、多くの罰金が科せられたりする中でも、なお求めてやまなかった、求めずにはいられなかった、同志としての関係であったというべきであろう。

幸徳による「自由思想」の定義の中の、「現在の家庭は其の形式をも精神をも破壊し去って自由なる男女関係を作らねばならぬ」という主張としての実行を、現実としてやったというだけのことだということか。

幸徳は、スガが入獄するたびに熱心に彼女の世話をした。誰はばかること

なくすることで、周囲からはますます怪しまれる。当人同士としては、絆がますます深くなっていったのではなかろうか。それは何よりも、世の中の変革、民主的な日本を作ることが何よりも先決であったからであるし、大きな目標を持って同一方向に向かって突進していたからだ。

荒畑は、スガの離婚の申し入れを、受け入れるには受け入れたが、内心かなりのショックを受けたようだ。1910年春、出獄し、大阪でピストルを手に入れ、秋水を狙おうと2人の住んでいた湯河原を訪ねた。しかし、2人とも不在で実行することができなかった。寒村には、まだスガに未練が残っていたため、「一時、その憎しみは激しかった」(自伝) と言っているように、幸徳を殺したいほど憎んでいた。

幸徳とスガを許す気は毛頭なかったであろうが、この時の手紙には、「御相談とか何とかいふ訳でなく、通知の形式なのですから－略－『主義の名によって快諾』の意をいのります」とスガが書いていたので、その流れになってしまったということであろう。

権力からの弾圧がこれだけ激しくかかっているとき、スガは荒畑との離婚、幸徳との結婚 (同棲？)、再び離婚 (同棲解除？) をしている。

5.「大逆事件」とは

瀬戸内晴美の『嵯峨野日記』に、大逆事件について書かれた文章2編が載せられている。題は「舞い姫」と「死出の道艸」というものだ。

『舞い姫』は、荒畑寒村が書いた短編小説で、「吾が生れしは、賤しき色街なりき。されば朝に見るものは、こうしふんけん (紅粉) の花の姿た、夕べに聞くものは、歌吹海裡の管弦の音。・・・」という書き出しで始まっている。幼い寒村と、色街の貧しい「舞い姫」との純愛物語である。「男の子はみだりに泣き給はぬものぞ、御身の涙は、妾はに濺がるべきものに非ず、只だ世の妾はと同じき、弱きもののために泣き給へ」というもの。色街の貧しい女性の身の上を聞いた寒村が、彼女のために泣いていると、彼女は、私のためにではなく、私と同じ世の中のほかの弱い女性のために泣いてくれ、と言ったという物語 (瀬戸内1986: 43) である。

瀬戸内晴美は、たいそう感動して、そばで聞いていた2人の女性が寒村の文章がむずかしいというので、いつかその2人のためにこの美しい詩を優しい文章に訳してみよう、と思ったと書いている。「果たして原文の稀有な香気をそこなうことなく私にそれが出来ようか」とまで瀬戸内に言わせている。ここで引用されている部分だけをみても、世の中の現状と、そこで織りなす男女の淡い恋の表現の筆致は、素晴らしいものだと、私には思える。

その後、瀬戸内の書いたものの中に、『舞い姫』の訳らしきものは見つからない。寒村は、瀬戸内にだからこそ「『舞い姫』だけでよいから、私の作品を読んでみてほしい」と言ったのだろう。

「死出の道艸」について書かれた部分にも、目を通してみたい。「死出の道艸」は、大逆事件で権力に虐殺された管野スガが、判決の下った日から処刑されるまでを書き続けた日記のことである。

「大逆事件」とは、1910年、「天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、又ハ皇太孫二対シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑二所ス」という刑法第73条に当るとして、社会主義者たち24名に死刑の判決が下された事件のことである。

当時の法律では、刑法第73条に当る大逆事件を裁判するのは、大審院だけであった。大審院とは、いまの最高裁判所に当り、ここでの裁判は「第1審ニシテ終審」というものあった。ここでは、控訴もなにも認められなかった。

弁護人の中には、広島県三原市出身の花井卓蔵もいたが、その中の一人である平出修は、石川啄木とも親しく、『明星』に作品を載せていた人でもある。彼は公判廷で被告たちの弁護をしたが、思想の変遷について次のように述べている。

新思想というものは在来の思想で満足できない時、おこるもので、いくらその思想を外部から力で押しのけても、心と心の感応から、その思想を必要とする人間の心に根ざしていく。無政府主義ならずとも、仏教徒でも、耶蘇教徒でも、乃至は帝国主義者でも、過度の抑圧を加えれば、犯行を起こすのは当然だ。

とスガたちを弁護している。

瀬戸内晴美には、『遠い声』と言う、管野スガが刑死するまでを詳細に書いた小説がある。

幸徳とスガの周りでは、いろんなことが次から次へと起こっていたが、ついに1910年、2人は家財を処分して、湯河原から上京した。この年の5月18日、スガは、換金刑に服するため入獄する。このような歴史的経緯からして、やはり2人の離婚（同棲解除？）は、入獄の予測をしていたからに違いない。

付け加えておきたいことは、「平民社」に出入りしていた人々の中には、足尾鉱毒事件に関係していた田中正造や、柳原白蓮の夫・宮崎龍介の父である宮崎滔天がいたということだ。あの時代を動かそうとしていたそうそうた

るメンバーが、この平民社に集い、自由・平等の思想を培おうとしていたのである。

桂内閣の方針も「徹底的に取り調べをなすことに同意」していたという訳だから、政治的な捜査が大いにあったということである。

獄中でスガは、平出修に与謝野晶子の歌集の差し入れを請うた。晶子は、「君死にたまふことなかれ」で戦争を「獣の道」と詠い、弟を案じた詩を発表した。「みだれ髪」で、女心を大胆に表現した晶子に、フリーラブの実行者で「自由思想」のスガが傾倒したのは必然であったろう。

また平出修は、石川啄木とは歌友であり、与謝野鉄幹の門弟であったのだから、当時の文壇との交流が、いかに強いものであったかがうかがえる。

1911（明治44）年1月18日、天皇の恩命と言うことで、24名の死刑被告中12名に減刑が言い渡され、無期懲役になった。1月24日には、幸徳ら11名が死刑を執行された。その事実を知らないまま、スガは女性一人、25日の朝8時に絞首となった。その理由は、24日中に12名全員を殺しきれなかったからだという。なんということであろうか。

幸徳、スガを含め5名を除けば、「よもやま話のようなものをしていたくらいのこと」を、でっち上げられ、大逆罪に結びつけられたものだった。

6.『死出の道艸』から

「大逆事件」について、あまりにも紙幅を割いてしまいすぎた感は否めない。伊藤野枝に焦点を絞るには、当時、日本の未成熟な国における革命家たちが歩んだ道のりの、前後の時代背景を記しておかなければならないと思うからだ。そして、ほぼ同時代を駆け抜けた2人（管野スガと伊藤野枝）の生きざまが、あまりにも酷似しすぎている点からしても、書き置くべきだと思ったからである。

管野スガは次のように書いている。

我等は畢竟此世界の大思潮、大潮流に先駆けて沃洋たる大海に船出し、不幸にして暗礁に破れたに外ならない。然し乍らこの犠牲は何人かの必ずや踏まなければならない階梯である。破船・難船其数を重ねて初めて新航路は完全に開かれるのである。理想の彼岸に達し得るのである。ナザレの聖人出でて以来幾多の犠牲を払って基督教は初めて世界の宗教と成り得たのである。夫を思へば我等数人の犠牲位は物の数でない。

獄中で処刑の日の前日まで書き綴られていた、『死出の道艸』の中に、そ

うある。我々は、メソメソしていたらスガに叱られそうだ。

スガは、権力から「無政府主義者だからやった」と言われたことを、「無政府主義者ならぬ世間一般の人たちでも、少しく新知識ある者が、政治に不満でもある場合には、平気で口にして居る様な只一場の座談を嗅ぎ出し、夫をさも深い意味であるかの如く此事件に結びつけて了つたのである」と言っている。

現在でも、権力は往々にしてこのような手口を使う。思うように国民を動かそうとするあまりに、少しでも抵抗したり反発したりする者がいれば、そこに言いがかりをつけては、押さえつけようとするのである。

こうして、日本中を震撼させた大逆事件のあと、「冬の時代」と言われながらも大杉たちは、黙っていたわけではなかった。「春三月　縊り残され　花に舞ふ」の句にあるように、なんとか世の中を動かそうとしていたに違いない。

社会主義運動が分岐しはじめた頃、堺利彦は、

1. 温和派（あるいは修正派）
1. マルクス派（あるいは清純派）
1. 直接行動派（あるいは無政府的社会主義）

と分類し、人でいえば、安部磯雄は右翼、幸徳秋水は左派、僕（堺）自身は中間派に属している。そして大杉栄は、幸徳秋水の立場を継承している、と言っている。

大杉の発行する『近代思想』は、文壇でも注目されるようになるが、この中の、

美はただ乱調にある。諧調は偽りである。真はただ乱調にある。

今や生の拡充はただ反逆によってのみ達せられる。新生活の創造、新社会の創造はただ反逆によってのみである。（「生の拡充」）

は、とくに有名な文章である。『大杉栄　自由への疾走』の中で、著者の鎌田慧は、「社会主義者の論文にはみうけられない、鮮烈な呼びかけである」との評価をしている。

大杉の呼びかけに、相馬御風なども集っていたようであるから、画壇、文壇にも大きな流れが押し寄せていたことがうかがえる。

『近代思想』の中で、大杉はつねに「主体」をかけて今の閉塞状況を突破しよう、と呼びかけている。そして、芸術運動によって、人々の心の変革に働きかけたことは、大きな成果を生んだ。

津田英語塾に通いつつ、極秘で「青鞜社」のメンバーとして、原稿を書いていた神近市子は、「青鞜社は婦人の道徳を乱し、社会秩序を乱す」と言う理由で、2年間の謹慎で卒業延期の処分を受けた。この人が後に、大杉との関わりを持つわけだ。しかし、当初大杉は、「青鞜社」の女性たちを批判していた。

その理由を大杉は、青鞜社の女性たちを「エリート女性の地位確保運動」として評価しつつも、「階級」と「連帯」に無関心な人たちだと指摘した。

大杉は、日本の論壇に論争をしかけていたが、次第にそのようなことにも嫌気がさしてきた。そのような自分自身を、次のように評価する。

・「近代思想」というくらいの思想をもって満足している。
・翻訳の仕事をもらい、平民不相応の小紳士的生活を送り、病気を口実に安閑としている。
・革命家とは聞いてあきれる。他人が革命について云々言うと、冷笑したり罵倒したりする自身の軽薄さがイヤになる。
・僕らは、もうその安全に飽きあきしたのだ。
もう今度は危険の中へ、そのわなの中へわざわざ飛び込んで行ってみたくなったのだ。僕らの本能と僕らの理智とが結び付いて、どうしてもそこへ飛び込んでいかねばならぬ力を、僕らの中に生じさしたのだ。(「賭博本能論」)

これを読んで、まさに大杉の心意気を見たような気がした。大杉は、食べるだけの金は、翻訳と言うインテリのみができる仕事をして稼ぎ、口先だけで革命を唱え、他人を批判することのみに終始している。こんなことで世の中を変革などできるか！と自らを言っている。

神近市子が「青鞜社」に入って半年ほど経った頃、「身なりの粗末な小柄な女性」が入ってきた、それが伊藤野枝であった。野枝は、親戚に勝手に結婚を決められたのがイヤで、平塚らいてうにそのことを手紙で知らせ、平塚から5円の旅費を送ってもらって上京したという、その時のことだったのだ。辻潤の家に世話になっていた頃である。

野枝に初めて会った平塚は、この時の印象を、「黒目勝ちの大きく澄んだ目は、教養や聡明さに輝くというより野生の動物のそれのように、生まれたままの自然さでみひらかれていました。—略—生命力に溢れるこの少女が、初対面のわたくしに悪びれもせず、自分の言いたいことをきちんと筋道立てていう態度には—略—情熱的な魅力が感じられるのでした」と言っている。

この原稿執筆のために、伊藤野枝に関する多くの写真を見ることになったが、平塚らいてうの言っている野枝に一番近い感じは、『伊藤野枝と代準介』の表紙一面を飾っている写真ではないかと思う。決して美人とは言えないが、浴衣を着て少しはすかいに構えたその目は、確かに野山を走り回る小動物のような眼を思わせる。

7. 野枝の子どもたち

大杉と野枝の四女であるルイの思い出を綴った、『しのぶぐさ　伊藤ルイ追悼集』の中で、『大杉栄　自由への疾走』の著者・鎌田慧は、次のように言っている。

「伊藤ルイと言う人は、静かでキリッとしていた。ひとの心をよく理解していたが、権威、権力がきらいだった。何の組織にも所属していなかったが、一人の人間として全国の人々と市民運動のネットワークをつくっていた。それは、アナーキストとして虐殺された大杉と野枝のやりたくて出来なかったことだったのではなかったか」と言う内容である。

大杉は、前述したように、ある一定の金持ち、インテリで、体を動かすこともなく理屈ばかり言っているのは、社会主義者でも無政府主義者でもない。もうそんな甘っちょろいことには飽きた、というようなことを言っている。両親が虐殺されたとき、満1歳になるかならないかの赤ん坊であったルイが、両親の遺志を継いで74歳まで生きたことに、何とも言えない感慨を覚える。命を張って生きた両親の生きざまを、彼女はしっかりと受け継いで生きたのだ。

この妹を、姉の野澤笑子さんは「妹逝く」と題して次のように詠う。

・末期癌の告知とともに決意して
延命治療を拒み県（おほ）せり

・ひたすらに見守りやりしをよしとせむ
妹の選びし一生（ひとよ）終わるを

・教会の蔡りに捧ぐる愛唱歌
異例なりけむ「ワルシャワ労働歌」

野澤笑子さんの短歌だけが、直筆で書かれて綴られている。この『しのぶぐさ』は、野枝が福岡県の生まれであることを知って、私が福岡の知人に、探してもらった本である。購入したいと思ったが、残部がないとのことで、

「福岡市女性センター（アミカス）」で、借りたものである。この中には、一人芝居の新屋英子さんの追悼文も載せられている。

新屋さんには、私が府中市役所人権推進課に勤務していたとき、一人芝居の「ヒミ子伝説」や「身世打鈴」などを演じていただいた。新屋さんは、優しく温かい人柄だったが、生き方をめぐって、同一方向を目指している者どうしは、かならず巡り会えるものだと伊藤ルイが言っているように、この新屋さんとルイとの結びつきは、偶然ではなく必然であったとつくづく思う。

ルイは、「形としての『人』は滅びるけれども、命を惜しまずに守られたその人の思想と行動は絶ゆることなく後世に受け継がれてゆく」とも言っている。ルイを、大杉と野枝の遺児だと知っている人も知らない人も、ルイが、人を大切にする生きざまをみて、側に寄ってきて、ともに草の根の運動をしている。まるで野枝の命をそのままに引き継いで生きたかのような、ルイの人生であったように思う。

野枝の作品がはじめて『青鞜』に載ったのは、1912年11月号の「東の渚」という詩である。

　　東の渚
東の磯の離れ岩
その褐色の岩の背に
今日もとまったケエツプロウよ
何故にお前はそのように
かなしい声してお泣きやる
　　－略－
ねえケエツプロウや　いっその事に
死んでおしまい！　その岩の上で―――
お前が死ねば私も死ぬよ
どうせ死ぬなら　ケエツプロウよ
かなしお前とあの渦巻へ―――

というもので、瀬戸内寂聴師は「この詩を読んで何の魅力も感じなかった。思わず失笑してしまった。この程度の詩を堂々と載せねばならないほど才能に恵まれていなかったのか」と、『美は乱調にあり』の中で述べている。

なぜなら、青鞜社の規約第1条に、「本社は女流文学の発達を計り、各自天賦の特性を発揮せしめ、他日女流の天才を産むを目的とす」と、堂々と高らかに謳っているにしては、青鞜に集っている女性たちがあまりにも無邪気に

思えたからだという。

そのような理由で寂聴師は、「最初、伊藤野枝を通り過ぎてしまった」とまで言い放っている。

この頃、野枝は辻と生活をともにしているが、日々、真新しい理論や思想に影響を受けつつ、青鞜での仕事をこなし、わからない理論はとことん聞き、質問する。それは、まるで砂が水を吸い込むように自らに血肉化していったことであろう。

辻は、自分の母親に、「野枝には勉強させているから」と言う理由をつけ、母の作った朝食を、2人は遅くから起きて食べていた。

私がいつも皆から浴びせられる言葉はわがままだということ、不幸者というこの二つの言葉です。本当にそうだと私自身も思います。そうしてそういう両親やその他の人たちの気持ちも私にはよくわかります。皆は私のことを人を苦しめておいて何とも思わないなんてといいます。何とも思わないどころか苦しくてたまらないのです。くるしくてたまらないのを我慢して自分の道に進んでいかなければならない、私の本当の心の奥底の苦痛は、誰一人何とも思ってはくれないのです。理智と感情は決して一緒には働かないものです。

――略――

私の嫌がるのを無理に自分たちの都合のために結婚させた。もし私がおとなしい、何にも考えることの出来ない魂のない娘だったらハイとおとなしく自分では少々いやな男だと思っても無理にでも辛抱したかもしれない。

と「従妹に」という文章に書いている。当時の社会状況の中で、いかに主体を持って生きようとしていたかがうかがわれる。「理智と感情は決していっしょには働かないものです」と、東京へ飛び出し大杉のもとに走った自分をも擁護している。

大杉には、妻の堀保子がいて、愛人に神近市子がいた。その3人の中に野枝が入ったわけであるから、関係は複雑である。野枝の出現に嫉妬した神近が大杉を殺害しようとして起こした事件が1916年の「日蔭茶屋事件」と言われるものである。ますます「新しい女」への、世間の反発は大きくなる。大杉の妹は、婚約破棄となり、自殺を図った。このようなことから、荒畑寒村や堺利彦も大杉から離れていくことになった。1917年、大杉は、妻・堀保子と別れ、9月には野枝との間に長女の魔子が生まれる。次女・エマ（幸子）、三女・エマ、四女・ルイズが続いて誕生する。1923年8月、長男・ネストルが生まれ、同年9月16日に大杉の弟・勇を見舞った後に甘粕に虐殺さ

れる。この間、大杉は、巡査殴打事件で入獄することがあったり、チフスで入院もした。

野枝は子育てをしながら夫を案じ、闘うということがどういうことなのかを深い視点で考え、多くの文章も書いた。

中でも、1921年に入院中の大杉宛に書いた次の書簡は、今の女性たちにも考えさせられることが大である。

私共の本当の結合の意味は夫婦であると云ふよりも、寧ろ、一つ道を歩く、一つ仕事をする、最も信じ合ふ事の出来る同志になると云ふ事の方に本当の目的があつた事は、お互ひに一番最初からよく知ってゐた事です。(略)けれど、私達の「家庭」と云ふ形式を具へた共同の生活が、何時の間にか、私をありきたりの「妻」と云ふものの持つ、型にはまつた考への中に入れてゐたのです。

と言い、「良人の仕事に理解を持つことの出来る聡明な妻」になってしまった、と自分のことを分析している。これでは女性は、独立することはできないと、訴えているのである。

こうして、大杉が入院して初めて、自分を「家庭」に結びつけしまっていたことに気づくのである。

そして、彼女の出す結論は、「要するに、他人との生活の交渉には、もつとお互ひに自分本位になる事。他人の生活に必要以外に立ち入らぬようにすることが何よりも大切な事」だと言っている。

入院中の大杉に、質問のような形で自問自答をしている。

この時から、2年も経たずして甘粕事件は起きた。

野枝の悶々とした、このような女性の立場を、いかに解決するかという方向もはっきりさせることもできないまま、権力によって抹殺されたのである。

甘粕事件の後、大杉と野枝の4人の遺児たちは、野枝の実家である福岡県糸島郡今宿村の祖父母に引き取られた。国家の世話にはならないという、無政府主義者としての考えで、出生届も役場には出していなかった。子どもたちに学校教育も受けさせてはいなかった。

しかし、祖父母は、長男ネストルは栄に、長女魔子は真子に、エマは笑子に、ルイズは留意子にという名前で、野枝の「私生児」として役場に届けた。

野枝は、辻潤との間の2人の子の時も、大杉との間の子ども達の時も、いつも、母ウメのもとに帰って出産した。そして、子どもを産むやいなや、お乳がほしくて泣いていても、おしめがぬれて泣いていても、腹ばいになって

原稿用紙に向かっていた。

子どもを連れて帰郷するときは、いつでも尾行が付きまとっていた。野枝は、尾行巡査におむつの荷物を持たせて、いっしょに帰っていたという。

また、辻潤との間の2人の男の子で、二男の流二は、生後7ヶ月の時、漁で切れた網を専門に繕う網職人の養子として預けられた。兄・まことの会社でコピーライターの仕事を手伝っていたこともある。日本郵船の貨物船に乗って海外に行ったり、北海道日高に移住して開拓農業をしたりして、再び横浜に戻りサラリーマン生活をした。

晩年は、油絵を描いたり、習字を習ったり、仏像を彫ったりと多趣味であったようだ。

流二は、小学一年生の頃、養父の計らいで初めて兄に会っている。鋭敏なユーモアは兄から、深く誠実な生き方は養父から学んだのでは、と本人は感じていた。

兄のまことは、「辻潤・野枝をどう読むかは読者の勝手である。しかし私をして言わしむるならば、願わくば諸賢はできるだけこういった歴史的社会的な問題意識として読まず、さまざまな解説などなしに、直接自分の心の対者として何を言っているのか聴いたり読んだりしてほしい」と言っている。

生母から離れて生きることを余儀なくされても、2人の子どもたちは、強烈な個性を、遺憾なく発揮して自由に、力強く生きている。二男の養子先の若松家には、野枝からの贈り物として、絹の祝着があった。流二は、大杉の土産の玩具のピストルで遊んだことなどの記憶があったという。

歴史に翻弄されつつも、したたかに生きたきょうだいであったが、どの子も大杉、辻そして野枝の生きざまから学んだ、世の中をしっかりした眼で見、文学や芸術から自分自身をみがき、考え、深く生き抜いた人たちである。

野枝の四女・ルイは、野枝が以前から交流のあった部落解放同盟の松本治一郎に就職の世話をしてもらったり、いろいろと相談に載ってもらったりした。

彼女が幼いころ、父母の墓にはめったに他人が参っては来なかったが、ある時、行商をしている老婆が墓参りをしていた。ルイの祖母が、その老婆から品物を買っても釣銭を直接手渡ししたことがなかった。家の外から、その釣銭を敷居の上に置いていた。ルイは、その仕草が異様に見え、ひどく不幸な陰を背負った人のように思えた、と回想している。

この老婆は、ルイの父母らが生きていたら自分たち(被差別部落の人たち・筆者注)の暮らしは、もう少し楽になっていただろう、と言ったそうだ。その老婆の言葉から、ルイは、初めて両親の生きざまを感じ取った。幼いルイ

たちに、誰も両親のことは教えてくれなかったからだ。ルイが大人になって、松本治一郎との出会いを話している理由が、このあたりのことからも伺える。

大杉や野枝の残した文章を読み込み、両親がなにを求めて生きようとしていたか。ルイは、権力がなにゆえに、父母の命までも奪わなければならなかったのかを、幾度も反芻しながら生きたことであろう。

ルイは祖母から、「お母さん私は、畳の上では死なれんとよ」と言う野枝の残した言葉を幾度も聞かされた。権力と闘うことが、どれほど厳しいものであるかと言うことを、野枝は痛いほど感じさせられていたからだ。

8.「死因鑑定書」見つかる

1976年8月26日の『朝日新聞』に、大杉栄、伊藤野枝、甥の橘宗一の死因鑑定書が見つかったことが報じられた。半世紀以上経ってのことだった。見出しには、「大杉栄事件　暴行のうえ絞殺」というものであった。

「・・・男女二屍ノ胸部ノ外傷ハ甚ダ高度ナルニ係ラズ皮膚ニハ之ニ相当セル損傷ナキヲ以テ衣服ノ上ヨリ加害シ致死後裸体ト為シ畳表ニテ梱包ノ上井戸二投ゼシモノト推定ス・・・」となっている。

ルイは、両親のことは歴史上の人物として、遠い存在としか意識していなかった、意識しようとしていなかったにもかかわらず、この新聞を読んで、まさに私の父と母のことだと思った、と言っている。周囲は、ルイの目に触れないようにしていたが、新聞が出て何日かたって知ることになった。ルイは、その夜一睡もできなかった。放心状態の一夜であった。

祖母から聞いていた、「畳の上では死なれんとよ」という野枝の言葉から、権力と言うものが、いかに恐ろしいものであるかを、この時初めて身に染みて知ったのだ。そして、母である「野枝」と言う人が、すごい女性であると知った。それまでは、周囲の人に「大杉はとても好きだけれど、野枝はよくわからない」と、2人を少し突き放して語っていた。野枝についてはあまり好きでなかったようだ。歴史で知る伊藤野枝は、同性として好きになれないタイプであったのかもしれない。

しかし、鑑定書に見た権力の行為には、言い難い怒りがわいてくる。

『朝日新聞』には、鑑定書は、軍法会議の命令で3人の死体を解剖した軍医大尉の妻が保存していたもので、「①大杉氏と伊藤さんの二人は肋骨などがめちゃめちゃに折れ、死ぬ前に、ける、踏みつけるなどの暴行を受けている、との新事実を明らかにしたうえ②死因は、三人とも首を腕などの鈍体によって絞圧、窒息させられたもの（扼殺）、としている。軍法会議は甘粕大尉ら

による殺害、として有罪判決を下したが・・・」など、赤裸々に詳細が報じられている。

自分の両親が、このような殺され方をしていることを知ったら、正気ではいられなかった。ルイの姉・魔子が早世したことも、弟のネストルが両親と死に別れ、福岡に連れて帰ってすぐに死んでしまったことも、すべて権力のこのような非人間的なやり方が双肩にかかっているからだと思った。ルイは、事実が半世紀も経って、暴露されるということにも、言い知れぬ怒りがわいた。

魔子は亡くなる前に、私たちはなぜ、こんなに苦しい生き方をしなければならないのか、と言っている。ルイは、自分たちの分もすべて長女である魔子に覆いかぶさっている。マスコミが執拗に大杉の遺児だとして死後何時までも追い掛け回すことにも、疲れきってしまった、と言っているように、やることなすこと、総てを報じられてしまう。人権感覚が希薄で、プライバシーも何もなかったこの時代に、鋭敏なこの子たちが生きていくためには、相当な重圧がかかっていたことだろう。

大杉と野枝は、虐殺されたあの日、なぜ真っ白い背広と、ワンピースを着て外出したのであろうか。まだ、関東大震災の起こったあとの大変な時であった。私には、この原稿を書き終わるまで、そのことへの疑問を払拭することができなかった。これは、権力に対しての挑発のようにしか受け取れなかったのである。

服の色など、どうでもいいではないかではなく、2人には何か深い思いがあったに違いないと思うからだ。

大杉栄は幸徳秋水と共に行動し学んでいるが、伊藤野枝は、管野スガと出会った形跡が見当たらない、と言うよりそのような文献を見つけることができなかった。

けれども2人には、権力に対する行動が、まるで闘いを共にしていたかのように思える。

荒畑寒村は、「アナーキズムの理論については、大杉はたしかに秋水よりも深い知識を持っていたと私は思うが、しかしそれよりも、彼の性格そのものがアナーキスト的であって、秋水の革命的ロマンチシズムとは選を異にする」と言っている。

大杉は、1908年の「赤旗事件」で懲役2年6ヶ月に処せられた。その「赤旗事件」で入獄中であったため、大逆事件の巻き添えにはならなかった。千葉監獄から東京監獄へ移送されるとき、獄中で大杉は幸徳はじめ大逆事件の被告たちとすれ違った。大杉栄と幸徳秋水は、それが最後となった。大杉の、

「春三月　縊り残され　花に舞ふ」の句には、そうしたことなどへの思いも詠み込まれているのであろう。

9. スガの「針文字」書簡も

いずれにせよ、伊藤野枝と管野スガは実によく似た性格をしている。

権力から、「取り調べなどは大急ぎでやって、関係者は一人残らず死刑にしてしまえ」と圧力をかけられたり、「被告のうち3名だけは、有罪の確信がないままに死刑を宣告してしまった」と平沼騏一郎の『回想録』で書いているように、「大逆事件」における権力のふてぶてしさは、許されざるものがある。

スガは、武富検事の取り調べには断固として答えなかった。武富の公判における論告は、辛辣で峻酷であったからだ。スガは、「貴官にだけは申さぬ」と言って、取り調べを強硬に拒否している。それだけではなく、裁判所の調所の卓上の鉄製の「灰落とし」(灰皿のことか？筆者) を引き寄せて、武富検事に投げつけようとした、と『日本社会主義運動史』にあるように、スガは抵抗した。『管野すが　平民社の婦人革命家像』には、

爆弾事件ニテ私外三名近日死刑ノ宣告ヲ受クヘシ
尚幸徳ノ為メ二弁ゴ士ノ御世話ヲ切二願フ

六月九日
彼ハ何二モ知ラヌノデス

という針文字が、横山勝太郎弁護士のもとに届いた。横山は秋水やスガと親交のある弁護士だが、スガはこの針文字の手紙を誰かに託して獄外に持ち出し投函させたのではなかろうかと思われる。スガは秋水をかばって、何事も語らず、一人検事に対して必死の防戦を続けていたことがうかがえる。

となっているが、2010年1月30日『毎日新聞』に、「処刑された幸徳秋水の救済を求め、獄中からひそかに新聞記者に送った書簡が、千葉県我孫子市で見つかった」という見出しで、大逆事件から100年も経って、針文字の書簡が見つかったことが報じられている。宛先は、朝日新聞記者だった杉村楚人冠である。彼の旧宅の書斎で発見された。

白紙に見える書簡は、下に黒い紙を引いて重ねれば、字が読めるようになっている。針で小さな穴をあけて書かれたものだ。

宛先が違うのは、2通出されたものなのか、言い伝えられてきたことが違っていたのか。研究者がその後のことを発表したかどうか分からないが、管野スガの切なる思いが痛いほど伝わってくる。どうにかして秋水を救いたいと思う気持ちが、針文字を思いつかせたのであろう。

「針文字を誰かに託し」となっているが、託した相手は看守か？教誨師か？そんな気がするのである。刑に立ちあい、この任務にあった人の談話は後に、スガに好意的な発言をしているからだ。他に持ち出しのできるものはいないであろう。

管野スガと伊藤野枝、いずれもすごい革命家であった。彼女らがあって、現在の日本の女性問題は民主化され発展してきた。彼女たちのことを考えると、今を生きる我々は、まだまだ闘い方が甘い。

【参照文献】

平田美知子2002,「うつしみ」『部落解放ひろしま』部落解放同盟広島県連合会編 56号　106-110頁.

平田美知子2003,「うつしみ」『部落解放ひろしま』部落解放同盟広島県連合会編 63号　135-140頁.

平田美知子2015,「うつしみ」『部落解放ひろしま』部落解放同盟広島県連合会編 96号　95-103頁.

池田浩士編2010,『逆徒「大逆事件」の文学』インパクト出版社.

井出文子1987,『平塚らいてう――近代と神秘』新潮選書.

伊藤野枝,『定本　伊藤野枝全集』第1-4巻　學芸書林.

絲屋寿雄1970,『管野すが――平民社の婦人革命家像』岩波新書.

鎌田慧1997,『大杉栄――自由への疾走』岩波書店

川本義昭1997,『続　蓮如への誤解』永田文昌堂.

小林登美枝1983,『平塚らいてう』清水書院.

松下竜一編,『しのぶぐさ――伊藤ルイ追悼集』草の根の会.

松下竜一1982,『ルイズ――父に貰いし名は』講談社

森宏一編集1971,『哲学辞典』青木書店.

森まゆみ編2011,『吹けよ　あれよ　風よ　あらしよ　伊藤野枝選集』學藝書林.

大杉栄2001,『大杉栄――自叙伝』中公文庫.

瀬戸内晴美1986,『嵯峨野日記』新潮文庫.

瀬戸内晴美1969,『美は乱調にあり』角川書店.

矢野寛治2012,『伊藤野枝と代準介』弦書房.

山本千恵1986,『山の動く日きたる――評伝　与謝野晶子』大月書店.

（ひらた・みちこ　広島部落解放研究所）